

敷地の中を歩いていると時々、比較的太い枝が落ちていることがある。風で折れたのかなと思っていたがそうでもなさそうだ。木々を見上げてみると枝の付け根の樹皮がきれいに無くなっているのが目についた。ネズミはあんなに高いところまでわざわざ登っていくとも思えなかつたし、ブルーンだとかの若木に比べると硬くて不味そうだ。現場を押さえたわけではないが、どうもアカゲラやコゲラなどのいわゆるキツツキか、ゴジュウカラの仕業というかお仕事のような気がする。これはまったくの推測だが、そもそも枝の付け根はその先の枝や葉の重みや風などの力に耐えなければならぬので亀裂が得意やすい。ほんの小さな亀裂でも、できてしまうとそこは菌類や昆虫の絶好の棲家や栄養になる。鳥は樹皮の下に潜む昆虫を狙って樹皮を剥ぎ取りにかかる。そうすると水分や養分の行き来が妨げられやがて枝は枯れて落ちる。そんなところかもしれない。木も元気な枝や葉に生きる力を集中させたいところだが、自分では剪定ができない。それを菌類や昆虫や鳥が手伝っているのではないか。ここに暮らしてただただ樹木や草の様子を見てみると、そのような意図せぬ繋がりがいろいろなどころで感じられる。ただ、ときには荒々しい試練もやつてくる。

二〇一八年の九月五日の未明、前日に近畿地方に大きな被害をもたらした台風二十一号が日本海を北上し、ここでは珍しいゴーツ、ゴーツという唸り声がしばらく続いた。朝になれば雨風も収まっていたが、家から出る道に大きな木が何本も倒れ行き来ができない状態になっていた。敷地のなかも見慣れた景色が少しおかしいと感じ見て回ると、あちこちに根ごと土から引き剥がされた木が何本も横たわっていた。あれだけどっしりと立っていた木がいとも簡単に倒されているのを見ると、地球の大気の移動である風だが、その力の凄まじさに怖気付く。

空を見上げると鬱蒼としていた場所が、妙に明るくなっていた。それまで空を覆っていた木々の葉が木ごとなくなってしまうのだから。その後どうなるのか。おそらく倒れた木のうちヤナギなどは生命力が強いので根が少しでも土に残っていれば、すぐにでも新しい芽が出て枝になっていくだろう。日当たりの悪かったところは、春先のまだ木々の葉が茂らない前に目覚めるスミレがほぼ独占していたが、これからは、そうはいかなくなるかもしれない。この時を待っていたヨモギやセイタカアワダチソウが準備を始めているだろう。

このように大風、大雪、洪水、大火事など、それまでの環境を一変させる出来事を「攪乱」というらしい。この攪乱があるおかげで、その環境で優位な種だけが占有を続けるのがリセットされ、生命の更新が促進されたり、種の多様性やが保たれるということか。それにしてもやるのが荒っぽい。

台風が通り過ぎた翌六日の未明に、震度五弱の地震に襲われた。胆振東部地震だ。我が家の被害は、棚のガラス器が床に落ち飛び散っただけで済んだが、震度七の激震に襲われたところはいたるところで山体崩壊が発生し、木々だけでなく多くの方の命が失われた。

